

CMSで サクサク更新 ウェブサイト

ウェブサイト
イントラネット
ホームページ

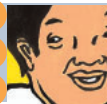


text : フリージャーナリスト増田"maskin"真樹 (Blog:metamix.com) illust : 小松恵

第12回

Wikiコラボレーションで企画を練り上げよう③ 総仕上げ～本格的なコラボレーションをすべてWikiで

ウェブサイト
イントラネット
ホームページ



メーリングリストとの組み合わせが強力

WikiはCMSの1つでありながら、複数のメンバーとのコラボレーションワークを変える特徴を持っている。使い方や構造は特異だが、より多くのユーザーに対して均等に参加機会を与えられ、いったん慣れれば多様なコラボレーションワークに使えるスグレモノのアプリケーションだ。特に紹介しているツール“PukiWiki”は、ブラウザやインストールするサーバーシステムの環境に依存せずに、共通のユーザーインターフェイスでコンテンツの編集と管理ができる。運営次第では、単なる企画書作りのプラットフォームではなく、MLや掲示板をリプレースする重要なインフラになるだろう。

メーリングリストから Wikiコラボレーションへ

この連載におけるWiki活用の目的は企画の練り上げである。数名からのメンバーで構成される「プロジェクトチーム」は、

何らかの目的を達成する企画を練り、実行するもの。非常に幅広い話題を詳細にわたって議論する必要があり、それを企画書としてまとめ、関係メンバー間でのコンセンサスを確立することが不可欠となる。

ところがドキュメント化のスピードは想像以上に遅く、プロジェクトの活動とシンクロナイズさせることは困難を極める。多くのプロジェクトチームが選択する対策は、ドキュメント化の選任スタッフを置いたり、唯一全体を見渡せるリーダーやサブリーダーがそれを担当したりすることだが、そこで生まれるドキュメントは『要件定義書』といったアウトラインや必須要件のサマリーにすぎず、詳細な議論やプロセスとの関係は除外されるか、かなり希薄になってしまう。

そこで、従来から積極的に活用されてきたのが、メーリングリストを使ったコラボレーションワークだ。ところが、メーリングリストではあらゆるやりとりをメールで行うため、細かい議論やプロセスが、メールボックス内で細切れになって保存される。また、メーリングリストには、議論のメイン

トリームがあり(図1) 詳細な詰めが許されなかったり、流れ次第では貴重な情報が埋もれ、見落とされたりする可能性もある。議論をアーカイブすることの有効性を主張する声はあるが、メーリングリストでは必要な情報を検索することすらかなりの労力を必要とする。実際、これがプロジェクトチームにとって利益をもたらすかと言うと疑問が残ると言わざるを得ない。

ところがWikiは、そういった問題も見事解決してくれる(図2)。

まずWikiは、『ドキュメント』『コミュニケーション』という異なる2つの要素を1つのページに併せて持てる。ページのどこにでも「#comment」によってコメント入力フォームを配置でき、必要なときに必要な規模の議論の流れを作れる(図3)。決め打ちされた議論の流れがなく、もちろんページ全体を議論の場とすることもできる。議論が行われているページに、公式ドキュメントに関連する情報が書き込まれ、その同じページ内で、限られた話題をぐぐつと深く詰めていくことができる。

また、Wikiではいったんばらばらに作成

したページを自由につなぎ合わせていくこともできる。つまり溜め込んでいった情報を、あとから振り返って構造を付け加えていくというワザも標準で行える。つまり、プロジェクトのメンバー全員で、多岐にわたる、一見收拾がつきそうもない議論とドキュメント化が行われていたとしても、最後にそれを整理してまとめることができるのだ。もちろんページをグループ化して、「公式ドキュメント」などとして整理することもたやすい。

リファクタリングで コンテンツを高品質に

つまりWikiによるコラボレーションワークというのは、「プロジェクトのメンバー全

員で、『カード』にさまざまな情報を書き込み、それについて議論して、カードを大きな企画用紙に並べていく作業」に近い。なんと自由で、創造性あふれる作業だろうか。

ところがWikiで取り扱うのは形のない“情報”であり、始めはどんなページが生まれるか予測もできないものだ。要するに、上で述べたように、カードではなく正体のわからないページがどんどん作られる可能性があるわけだ。特にもっとも問題となるのが「ページの名付けが不統一」という問題だ。

たとえば、こんなページの名前が並ぶWikiがある。

1. システムの構造上の問題点
2. 運営コスト計算上の考察

3. 理論の思考法
4. SQL記述のルール
5. UIはSEOを考えて
6. ごめんなさい
7. InfoArchive
8. FutureStream

まず「1. システムの構造上の問題点」「4. SQL記述のルール」は、単独でドキュメントの中心的存在になるとは考えにくい。「内容が一目でわかる」という意味では成功例と言えるだろう。ところが「2. 運営コスト計算上の考察」「3. 理論の思考法」と言われても、何がしたいのかよくわからない。2は「運営コスト計算ポリシー」とでもすればわかるかもしれないが、3は致命的だ。

「5. UIはSEOを考えて」は伝わること

図1 メーリングリストにおけるコラボレーション

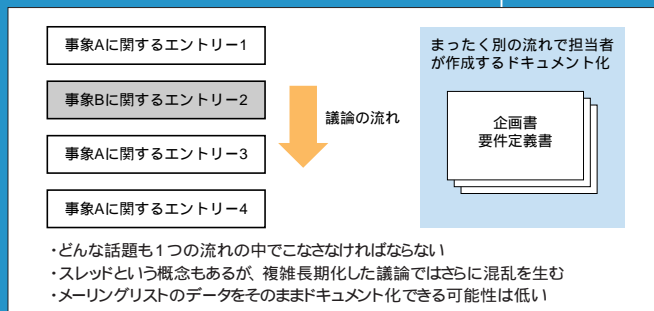


図2 Wikiにおけるコラボレーション

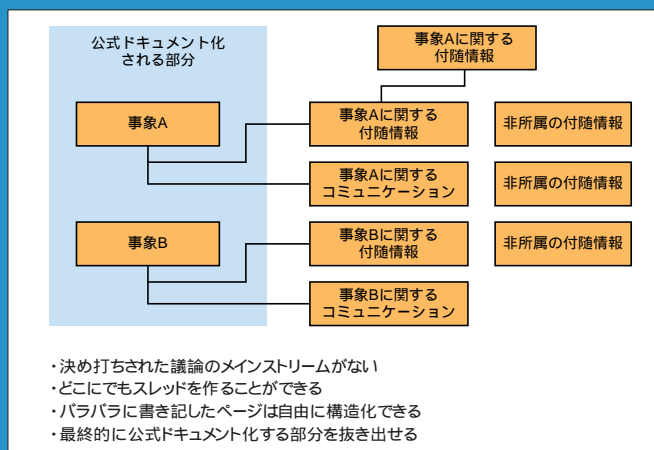
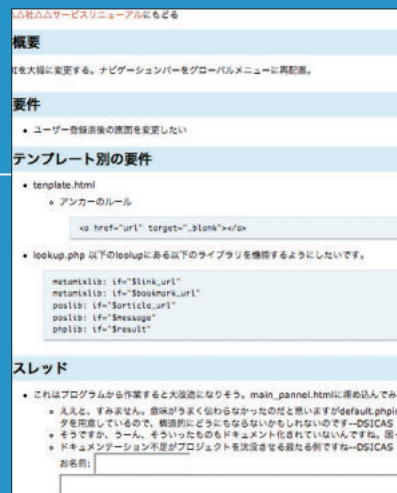


図3 スレッドを含んだドキュメント



公式ドキュメントとして使えるページの一部に掲示板機能を配置したところ。”スレッド”という部分が該当部分。プロジェクトの詳細部分がどういったプロセスで決定されたかが理解できる、極めて貴重な資料となる。議論がこのページにそくわない方向に向かうなら、切り出して別のページに引っ越しをさせればよい。

は伝わるのだが、別にWikiページにする必要もない。これこそ一斉告知型のMLに流したほうが適切だ。「6.ごめんなさい」も同様だ。Wikiは“ページを残すこと”を前提にしたシステムだから、時事性が高く一過性の情報には合わない。

「7.FutureStream」は英語だという点で、ほかのページ名とは異なるが、短すぎてよくわからない。「8.InfoArchive」なら意味はまだわかるが、ほかのページが日本語中心なら、いずれ合わせる必要も出てくるだろう。

このようにページ名の付け方の不統一は、Wikiコラボレーションに深刻な問題をもたらす。というのは、ページはいずれインデックスとなる“親ページ”にリンクされて整理されることが多いので、名付けに失敗すると「親のないページ」が大量に生

まれてしまう可能性があるからだ。つまり、どこにもインデックスされないし、分類もされないページだ。親のないページの質が悪いかというそうではなく、単純にWikiページ群(=コンテンツ)の全体の構造上の問題となる。まとめ役となる人物がいるのなら、メンバーが慣れるまでメールやメーリングリストで使い方を教えたほうがいいだろう。

このようにWikiによるコラボレーションでは、「ドキュメントの執筆」「ページ内の箇所に関する議論」「ページリンクによるコンテンツの構造化」という基本作業が生じる。これらをバランスよく行っていくことで、すべてのメンバーがページに分散し、あらゆる項目に対して詳細なリファクタリング(ページ内のコンテンツの再構成)を行い、ドキュメントの高品質化を追求でき

るようになるのだ。

ただ「いちいちWikiの更新部分をチェックするのは手間」という意見もある。ごもっともである。PukiWikiの場合、更新されたページのリストが左メニュー部に表示されるが、どの部分が更新されたかはページを開き、グローバルメニューから「差分」をクリックするしかない。あらゆるページでいくら詳細な動きがあっても、それをキャッチできなければ意味がない。そこで、PukiWikiの「更新差分のメール告知機能」を使ってみよう。

カスタマイズして 更新情報をメールで受信

本誌2003年12月号のこの連載でPukiWikiのインストール方法を掲載したときは、バージョンは「1.38」だったが、最新のPukiWikiは「1.42」になっている。このバージョンアップで、blogで一般的となったトラックバック(逆リンクを自動的に生成する機能)などの新しい機能の追加や、これから説明するメールによる告知機能の不具合などが解消されている。したがって、バージョンアップはぜひおすすめする。なお、ここで紹介するカスタマイズ方法は、1.42に準拠することにする。

バージョンアップを実行する前に、PukiWikiがインストールされているディレクトリーのバックアップを忘れてはならない。また、1.3x系から1.4x系へのバージョンアップでは、PukiWikiの設定ファイル「pukiwiki.ini.php」の構成が変更されているので、バージョンアップ後は設定しなおす必要があることに注意してほしい。なおバージョンアップには差分ファイルが用意されているので、ほとんどの場合、該当箇所にファイルをアップロードして上書きするような簡単な処理で済む。

PukiWikiのカスタマイズは、ルートの「pukiwiki.ini.php」ファイルを編集することで行う。基本的な“ページ名”や“編集者名”、“URL”の設定などは済んでいるも

図4 pukiwiki.ini.php設定ファイルの変更箇所(217行目から)

```
#####  
// ページの更新時にメールを送信する  
$notify = 1; ..... ここを1にする  
// 差分だけを送信する  
$notify_diff_only = 1; ..... ここを1にすると差分だけの送信になる(オススメ)  
// To(宛先)  
$notify_to = 'wiki@metamix.com'; ..... 更新メールの送り先。プロジェクトのMLなどが適当  
// From(送り主)  
$notify_from = 'leader@metamix.com'; ..... メールを送り主を設定する。リーダーや担当者など  
// Subject(件名)$pageにページ名が入る  
$notify_subject = '['wiki] $page'; ..... メールタイトル。wikiのところを  
// 追加ヘッダ ..... わかりやすい名前にする  
$notify_header = "From: $notify_from\r\nX-Mailer: PukiWiki/'.S_VERSION."  
PHP/'.phpversion();  
// POP Before SMTP を実施  
$smtp_auth = 1; ..... メール送信の前に受信が必要なプロバイダの場合1  
// SMTPサーバ名を指定する (Windows のみ、通常は php.ini で指定)  
$smtp_server = 'smtp.metamix.com';  
// POPサーバ名を指定する  
$pop_server = 'pop.metamix.com';  
// POP のポート番号 (通常 110)  
$pop_port = 110;  
// 認証に APOP を利用するかどうか (APOP 利用時は 1、以外は POP3)  
$pop_auth_use_apop = 0;  
// POP ユーザ名  
$pop_userid = 'xxxxxxxxxxxxxxxx'; ..... 送り主アカウントのメールサーバユーザーID  
// POP パスワード  
$pop_passwd = 'xxxxxxxxxxxxxxxx'; ..... パスワード
```

のとして進める)、「更新差分のメール告知機能」の設定は、設定ファイルの217行目あたりにある。図4で示すとおりに変更情報を入力すれば機能する。

設定ファイルを編集後、サーバーにアップロードすれば処理は完了する。ページの一部を編集すると、すぐにメールが送られるようになる。メールだけでWikiコラボレーションの稼働状況を知れるので重宝する(図5)。この設定では送信内容は差分のみになる設定をしているが、十分に内容が予測できるのでそのほうが使いやすい。必要があれば、ウェブブラウザを開いてWikiをチェックすればいい(図6)。

メールと連動するようになってくると、メールとリストとの差が歴然としてくる。当然、無駄なやりとりもなく、コンテンツの追加や構造の変更、議論だけが告知される。チームワークの活動状況がメールで告知されるだけでなく、Wikiデータベースにしっかり保存される部分は、画期的だしが言いようがない。

「そのまま入力できる」 Wikiの隠れた魅力

ではWikiは万人向けのツールなのだろうか。その答えがわかるこんなできごとがあった。

この連載でWikiを取り上げてすぐ、筆者宛てに「Wikiとの出会いに興奮しています」という言葉が多数寄せられたのだ。意外だったのは、IT業界で活動するクリエイターやディレクターなどその最前線で活動する人々が、Wikiをこれまで体験したことのない新鮮なシステムだと捉えていたことだ。「Wikiという名前こそ知っていたけれど、これほど柔軟で使い勝手がいいものとは思わなかった」ということらしい。

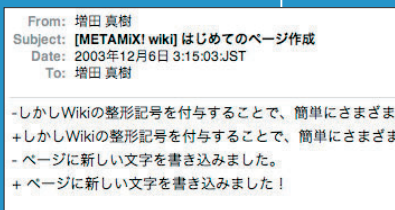
もっとも評価されたのは“HTMLタグを使わない”という点だった。前回解説したとおり、Wikiクローン(Wikiベースのツール、この連載ではPukiwiki)には独自の記述ルールがあり、それを使ってアウトライ

ンやリスト、表組、コメント欄などの作成を省力化できる。特に今回のテーマである企画作りには必要十分な記述ルールがそろっていると見える。

では、“記述の簡便さ”が人気のキーなのかと言われると、そうではない。実は、“Wikiのページ内ではHTMLが無視される”というのが、本格利用へのきっかけとなるもっとも大きな理由となっているのだ。

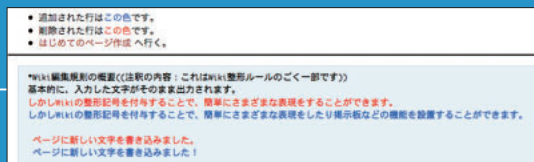
図7を見てほしい。これはあるウェブ開発企画のWikiで、タスク内容を書き記すページを作っているところだ。「*」で始まるいくつかの見出しの中に、“テンプレート別の要件”という項目がある。その中に、アンカータグ「」やダブルクォーテーション「"」が含まれる文字列が入力されている。通常、これらの文字列は、ウェブページ上に表示させようとすると特殊なコードを付加する必要がある。ウェブの掲示板などにそのままポストすると、勝手にHTMLなどのタグと解釈されてさまざまな問題を引き起こしてしまう。当然、

図5



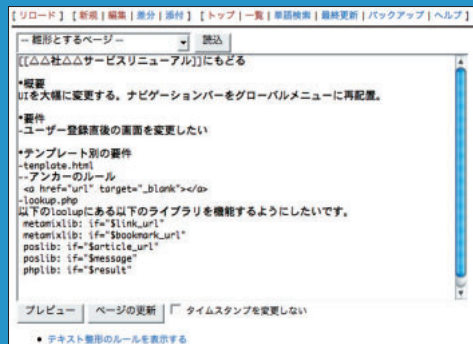
どのページでどこが編集されたのか、変更箇所だけがメールで送られてくる。タイトルにはページ名が表示される。行頭に「-」がついているのは削除された文章。「+」がついているのは追加された文章を表す。

図6 変更箇所をサイトでもチェックできる



実際、編集されたページで「差分」ボタンを押すと、どこが変更されたかがわかるようになっている。

図7 整形ルール以外のテキストはそのまま表示される



あるウェブ開発プロジェクトのタスクに関する情報を整理するページ。概要や要件、構成ファイルごとのメモや質疑応答を行う。画面を見てわかるのとおり、入力したテキストはそのままブラウザの画面に現れるため、利用者の手を煩わせることはない。

オンライン上でのコラボレーションのような、業務の一環として頻繁に情報のやりとりをする用途では使い物にならない。

ところがWikiの場合、入力後は、そのままの形で画面に表示されるようになる(図7の右の画面)。つまり、入力した文字列は、何の加工手続きも必要なく、Wikiのシステムがウェブブラウザ上で適切に表示されるように自動で処理を施してくれるのだ。これまで“Wikiの整形ルールはあまり高度ではなく直感的とも言い難い”と説明したが、実は整形ルールがシンプルであるため、かえってテキスト情報の表現力を活かせるというわけなのだ。

書籍の編集作業でのWikiコラボレーション

Wikiは、プログラマーやデザイナー、ライター、ディレクターなどさまざまな役割を持つメンバーで構成されるウェブサイトの企画開発チームなどにはとても適している。筆者は実際にそういったプロジェクトでWikiを導入してみたが、これまでこなししてきた同様のケースと比べて、圧倒的に

メールやメーリングリストに情報を流す頻度が減った。その分、Wikiに保存する情報が増えたのかと言うと、そういうことではない。無駄なコミュニケーションが減り、整理されてまとまったドキュメントを作れるようになったと感じる。更新差分のメール告知と連動することで、大きな改善をWikiはもたらしてくれる。

しかし、ほかのケースではどうだろう。インターネットマガジンでの米国レポートなどでおなじみの長野弘子さんと執筆している『ブログ式(仮題)』(英治出版、2004年1月刊行予定) 詳細は筆者のblogを参照)の編集は、2人で密に相談しながら進めてきたが、そのコラボレーションツールとして最終的にWikiを採用した。

Wikiは活用できたのか? 実はその前にblogを使ってコラボレーションを行おうとしたのだ。

blogのツールもWikiと同じように、テキスト情報の入力が極めて簡単だ。しかも、blogツールにはMovableTypeを使ったので、カテゴリーによる分類もできる。とにかくあらゆる情報をここに納めて、考えがまとまった時点で整理すればいいと思っていたのだが甘かった。

確かに入力は楽だし、最新情報を共有するには成果があった。しかし、それらを整理して、“本という構造”を組み立てようと思ったとき、blogツールではそれができなかった。Wikiで言う「カードをシャッフルして、好きなように並べていくこと」がblogツールにはできなかったのだ(図8)。この問題にはかなり早期に気が付いた。blogツールの基本は、記事を時系列にアーカイブすることで、たとえカテゴリーが作られても、Wikiのようにアウトライン構造を作ることには向いていない。やはりblogツールの特性は、時系列に発生する記事を公開するためのパブリッシュ型ツールだったのだ。

私たちはすぐにWikiに乗り換えた。整形ルールを習得するまで少し手間取ったが、まもなくメモや記事をどんどんWikiに並べていくことができた。ある程度の情報がたまった時点で、構造を再編集したり、全体の編集感覚を見直したりすることができた(図9)。

実際の作業レベルでは、ほとんど問題は起こらなかったが、最後の最後になって問題が発生した。アクセスが集中する情報量の多い目次ページを、2人が同時に編集し

図8 失敗に終わったMovable Typeで書籍を作るコラボレーション



情報が時系列で流れてしまい、あとでまとめることが難しくなる。

図9 Wikiで書籍を作るコラボレーション



情報をインプットすることを積み重ね、あとから情報を関連付けて順序を入れ替えて再編集できる。

てしまったのだ。“これは面倒なことになった”と慌てたが、そんな心配はなかった。

複数のメンバーが同じページを編集してしまっても、PukiWikiなら衝突の検知を行い、どこが衝突している箇所かを表示してくれる仕組みになっている。図10のように、ページ編集後に【更新の衝突】が告知され、そこに自分が編集した箇所と、すでに他のメンバーが更新した箇所が表示される。もし、同じ箇所を編集したのではないことが確認されれば、PukiWikiは自動で衝突を解消して、更新をマージしてくれるのだ。

もし、まったく同じ箇所を同時に編集してしまっただとしたら、衝突の状況を見ながら、再度更新作業を行えばいい。もし、編集上のミスで、誰かの更新を消してしまったとしても、グローバルメニューから「バックアップ」を選択すれば、変更前の状態に戻せる。

Wikiが持つ特性から その適用を考察してみる

3回にわたってWikiクローンの1つである「PukiWiki」を解説してきて感じるのは、ビジネスにおいてWikiは、アイデアをまとめて企画を練り上げるという使い方に最大限の効果を発揮するということだ。メンバーの1人1人が自由にかつ十分に個人の能力の発揮を追求でき、Wikiはそれらをつないで成果物にまとめられる性質を持つ。

そこで筆者が思い浮かべたのがニューヨークの『オルフェウス室内管弦楽団』だ。1972年に創設されたオルフェウス室内管弦楽団は、世界唯一の“指揮者のいない”オーケストラだ。全米屈指のプレイヤーから構成されるこのオーケストラでは、メンバー全員が持つ創造性へのあくなき追求が、結果として良質なサウンドを生み出す。指揮者がいないことでばらばらになるどころか、各人が能力を発揮することが、オーケストラという総体の質を高める構造にな

っているのだ。

Wikiにも似た要素がある。Wikiのページには制限というものが無い。どういったタイプの内容を入力してもそれを受け入れ、結果としてそれぞれのページや各項目が関係性を生み出し、Wikiコンテンツの質が高まっていく。

Wikiに限らずCMSに共通することだが、“インプット”という観点でこれらのシステムを見たとき、とにかく敷居が低く自由度があるとと言える。特にWikiは、どんな単位で情報を編集してもいいし、文章を追加したり文字を消したりすることも、ほかのページなどのリンクを作ることも自由だ。この自由度は、参加するメンバーの情報取り扱い能力を求め、よけいなことを考えず、目標に向かってまっすぐに突き進むことを許してくれる。

ただ、組織内で企画を練り上げるためにWikiを使うとしたら、数十人での運営は考えにくい。また、サステナブル(継続可能)なツールとして捉えないほうがいいだろう。質が悪化するようなら、Wikiによるチーム運営からは一度離れた方がいい場合もある。Wikiのデータベースは、単なる

テキストファイルに保存されるので、二次加工がしやすいため、そういったアクションにも応えやすいのだ。

時代が追いついた今 CMSの次なるステージへ

この連載が始まってはや1年。blogやコミュニティー型CMS、Wikiといったツールのハウツーを通じて、『CMS』という巨大な論点への注目を高めていく狙いだったが、今になってようやく“これからはCMSだ”という人が増えてきたようだ。

さて、次回からどうするか。さまざまな思惑が錯綜するが、実はこの原稿を執筆しているこの時点で方向が確定していない。CMSの新しいステージへの扉を開ける内容を考えていきたいと思っている。

なお、例によってこの連載と連動したWikiを用意してある。アドレスは下のURLになるのでぜひ利用してほしい。これまでの連載で紹介したり利用したりしたリソースはここに継続して蓄積していこうと思う。

URL <http://www.metamix.com/pukiwiki/>

図10 同時に更新して衝突しても大丈夫

http://www.metamix.com/pukiwiki/pukiwiki.php?A4%CF%A4%B8%A4%E1%A4%C6%A4%CE%A5%DA%A1%BC%A5%B8%BA%EE [リロード] [新規] [編集] [差分] [添付] [トップ] [一覧] [単語検索] [最終更新] [バックアップ] [ヘルプ] [TrackBack(0)] [リンク元]

あなたがこのページを編集している間に、他人が同じページを更新してしまいました。
自動で衝突を解消しましたが、問題がある可能性があります。
確認後、[ページの更新]を押してください。

l : between backup data and stored page data.
r : between backup data and your post data.

l	r	text
		*Wiki編集規則の概要((注釈の内容: これはWiki整形ルールのごく一部です))
		基本的に、入力した文字がそのまま出力されます。
		しかしWikiの整形記号を付与することで、簡単にさまざまな表現をしたり指示板などの機能を設置することができます。
-	-	ページに新しい文字を書き込みました!
+	+	ページに新しい文字を書き込みました!

Wikiでは同じページを異なる2人が同時に更新しても衝突したところを検出してくれる。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp